

## ラオス・カンボジアでの短期海外活動報告

九州大学教育学部 4年（活動当時） 宮崎優希

### 1. 活動の概要

私は「日本式の教育とは何か」という問いに関心を持っている。今回、卒業論文の執筆と今後の研究発展に向けて、ラオスとカンボジアの教育機関を訪問した。今回の調査では、文献から得られない感覚や情報に触れることを重視するため、「日本式」が実践される現場だけでなく、それを取り巻く環境や歴史的背景、現地の暮らしなどに目をむけることを意識した。

今回訪問したのは、日本人が関わる6つの学校で、それぞれ①日本にルーツを持つ子どもを主な対象とした私立学校（在外教育施設）、②現地の子どもを対象とした私立学校、③現地の子ども向けの公立学校に分類できる。前者2つの学校では、日本の教育スタイル（挨拶、給食、掃除など）が取り入れられており、後者の公立学校では、日本人が日本語授業の補助役として関わっていた。学校では、「日本らしさ」と「現地らしさ」がどのように共存しているかに着目して活動を実施した。学校のほかにも、プノンペンの子屋やラオスの技能実習生送り出し機関などを紹介していただき、実際に訪問した。中でも、日本人学校では、事前に準備したインタビュー項目をもとに教師への聞き取り調査を実施し、「日本的な教育実践とは何か」「どのような場面で難しさを感じるか」といった質問をさせていただいた。授業時間中は、学習支援ボランティアとして授業に参加し、休み時間には生徒と交流を行った。ラオスの公立学校では、日本語パートナー（国際交流基金派遣の日本人）の活動を見学させていただき、お話を伺った。ラオスでは、日本語パートナーズのみなさんによる紹介を通じて、JICAの青年海外協力隊員や元協力隊員とも交流する機会を得ることもできた。これらの経験を通じて、日本人がどのように海外の教育現場に関わっているのかを学んだ。

### 2. 活動を通じての学びと今後の展望

本活動全体を通して、「日本式教育」とは外部からの定義としての性質が強く、現場で奮闘する教員たちは「何が日本式で何が日本式でないか」について強く意識しているわけではないことに気づいた。現地で教育に携わる日本人たちの多くは、ラオスやカンボジアの文化や人々が好きだという気持ちから、現地のニーズを吸収しながら自分にできることを模索していた。彼らの実践は「日本式の教育を提供する」ものではなく、現地の課題と向き合う中で、偶然持ち合わせた日本での経験を活かして形成されたようなものだった。結果として「日本式っぽい」要素が取り入れられることも多いが、それは意図的なものではなく、自然に生まれたものであるという点が興味深かった。今後は海外で活躍する日本人が、自らの立場性についてどのように捉えているかについてより丁寧に見てみるのも面白いかもしれない。

以上のように、「日本式教育」の捉え方や、現地で奮闘する教育者たちの実践のあり方について新たな視点を獲得することができたこと、海外で活動する日本人とのつながりを持てたことが、本活動の大きな成果である。4月からの修士課程では、本調査で得た視点や人脈を活かしながら、海外で日本を背負う日本人についての研究を深めていきたい。本活動の実施にあたり支援をいただいた教育学部同窓会の皆様に深く感謝申し上げて本報告の結びとする。